

校長室通信

令和7年8月1日号
志免町立志免西小学校
高良 祐治

夏休みに入り、2週間が過ぎようとしています。今年もとても暑い日が続き、校庭の植物もぐったりとしています。でも、子どもたちは、今の学年では一度きりの夏休みを思い思い楽しんでいるのでしょう。中学生や高校生になれば、部活動や受験のための塾通いなど、自分だけの思い通りの夏休みは過ごせなくなりがちです。自分で計画を立て、自分で充実した夏休みをつくってほしいと思います。

児童質問紙調査

先月、4月に全国の6年生を対象に実施された全国学力学習状況調査の結果が届きました。本年度は、国語、算数、理科が実施され、その結果については、前期前半が終了するまでに一人一人に返却しています。

さて、この調査では、教科の学力調査とは別に、「児童質問紙調査」という子どもの生活や学習の仕方等について把握することを目的とした調査も行われています。今回は、この質問紙調査の中の「読書」に関する調査結果から考えたことを述べたいと思います。

お子さんは本を読めますか？

質問項目の一つに「学校の授業時間以外に、普段(月～金)、1日当たりどれくらいの時間、読書を読みますか(教科書、参考書、漫画、雑誌は除く)」という質問があります。結果は、「全く読まない」と回答した6年生は37.9%(全国29.2%)、「10分未満」は16.3%(全国17.4%)でした。つまり、本校の54.2%の子どもたちは、学校から帰ってほとんど読書をしていません。

さらに、「読書は好きですか」という質問に対して「当てはまる」と回答した子どもは26.1%で、全国平均の36.4%より10.3%も低くなっています。

本校では、図書館を積極的に活用し、毎週のように貸し出しの時間を設定したり、テストなどが早く終わった子どもに対し、借りている本を読ませたりするなど、本に接する時間は確保しています。しかし、これらの結果は、私たちの指導が、図書の間があるから何となく借りている、「本を読みなさい」と言われるから何となく本を開いているような子どもたちを多く生み出しており、主体的に読書を楽しもうとする子どもたちを育てていないという厳しい現実を突きつけて

いるものと受け止めています。読書は、多くの言葉に出合うことを通じた豊かな日本語の習得はもちろん、「この先はどうなるんだろう」「きっと主人公はこんな思いで、そのような行動をとったんだろうな」といった、ワクワクドキドキや想像の機会をたくさん提供してくれます。そして、様々な本に出合うことで、豊かな人間性を醸成することにもつながると思います。

読書に親しむ習慣は、発達段階に応じて、適した本に出合い、読み終えた時の充実感を味わうことを重ねていくことで、身に付いていくと思います。そして自然と、今の自分に適した本を選び、読み進める力が育っていくのだと思います。電子書籍など本の形は変わっていくのかもしれませんが、人生のその時々で、「読みたい！」と思ったときに「読める力」を身に付けておくことは、とても大切だと思います。

そういう意味で、本校の子どもたちが、読書が好きではなく、家でもほとんど本を読んでいないということに対して危機感を感じています。

ちょっとしたきっかけから

私自身、小学校の頃はそこまで本好きではありませんでした。きっかけは、中学校1年生の時に同じクラスになった瀬田くんが、常に文庫本を持ち歩いていて、冷やかし半分に「本の何がそんなにおもしろいのか？」と聞いてみたことです。瀬田くんは、本の魅力を熱く語り、文庫本初心者にはこんな本がいいのではないかとアドバイスまでくれました。このことをきっかけに、競うように文庫本を読むようになり、今でも就寝前には本を読んでいます。

子どもが読書好きになるのは、こんなちょっとしたきっかけからだと思います。学校でも、担任による本の紹介などを積極的に行っていこうとしています。ご家庭でも読書について語り合う場をつくっていただけたらと思います。